

大阪製薬と大日本製薬(明治 32 年)

薬学雑誌 206 号 400 頁(1899)ほか

2005 年 10 月、大日本住友製薬が誕生した。なんか窮屈な感じの社名だが、大日本などという時代がかった名前が残ったのは、ちょっと嬉しい。大日本製薬は、明治 16 年、半官半民会社として東京に誕生した。設立は、それまで高価で劣悪品も混じる輸入医薬品に頼らざるを得なかった我が国の悲願であった。

一方、明治 30 年、道修町の有力薬問屋 21 社が、共同で大阪製薬株式会社を設立する。社長：日野九郎兵衛、取締役：田辺五兵衛、塩野義三郎、宗田友次郎、小磯吉人、小西久兵衛、上村長兵衛、監査役：小野市兵衛、武田長兵衛、谷山伊兵衛(薬誌 1897 年 189 頁)。同社は翌年 10 月、経営悪化していた大日本製薬の器械什器をすべて買収、栄光ある商標、社名も継承することに決めた(薬誌 1898 年 1, 140 頁)。

翌 32(1899)年 4 月 15 日、大阪市外、鷺洲村海老江なる

同社製薬所で盛大な開業式を行う。連日の雨が上がり、天高くさえずるヒバリの声と満開の菜の花畑。人力車が続々と吸い込まれる門の外には、村人集まり、屋台が軒を連ねてお祭りのよう。

長与中央衛生会長、長井薬学会会頭、菊池陸軍軍医総監ら四百余人の来賓、迎える社員は二百余人。社長は来賓を一々奉迎所に迎え、徽章と順序票、業務案内書を渡して事務所階上の休憩所に案内、茶菓、ビールを出し、数人集まると技師が工場内を案内した。見学が終わると「嬋妍たる美女に擁さしめて之を模擬茶店ビール店団子店等数軒を構へたる春風賞観の遊園場に導きて優遇至らざるなし」

時は流れて 21 世紀。もし武田、住友、塩野義が合併すれば幻の「大阪製薬」が復活するかもしれない。さらに妄想すれば 2 年後、今度は東日本の「日の出製薬」と合併、世界 3 位となるはず。社名はもちろん「大日本製薬」、明治 16 年と同じ期待を込めて。

小林 力